

■ 概況

2/11～2/17のNYMEX・WTI先物市場は、58.24～61.14ドルの範囲で推移した。

2月18日は、テキサス州を中心とする寒波襲来で、配管凍結等による供給障害の発生があり、時間外に一時62ドル台を記録したが、最近の高値の反動で、利益確定売りが優勢になり、4営業日ぶりに反落した。3月限の終値は前日比0.62ドル安の60.52ドル。

週末19日は、寒波による供給不安が一段落、復旧に向けて動き出したことから、利益確定売りが先行し、大幅続落した。なお、米国内で稼働中の石油掘削装置は前週末比1基減の305基と13週ぶりの減少となった。3月限の終値は前日比1.28ドル安の59.24ドル。

週明け22日は、寒波自体の影響は一段落したものの、復旧作業に時間を要しており、供給懸念が続いていること、また、OPECプラスが3月4日に開催する閣僚会合で4月以降も現行減産体制を維持する公算が高いとの報道から、大幅に反発した。この日納会を迎えた3月限の終値は2.25ドル高の61.49ドル。

23日は、前日の高値による利益確定売りが先行したが、根強い供給懸念による下値も強く、わずかな値下がりとなった。この日から取引の中心限月となった4月限の終値は前日比0.03ドル安の61.67ドル。

24日は、寒波の影響が長引く中、コロナ禍の早期収束への期待感の高まりで、米国株価は高値を更新し、原油先物も大幅に反発した。なお、米国エネルギー情報局(EIA)の週間在庫報告は、原油は前週末比120万バレル増と市場予想に反する5週ぶりの積み増しだったが、大きな影響はなかった

模様。4月限の終値は前日比1.55ドル高の63.22ドル。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(4月渡し)は2月11日～17日の間60.10～62.60ドルの範囲で推移した。2月18日63.60ドル、19日61.70ドル、22日62.00ドル、23日休場、24日62.60ドルと推移した。

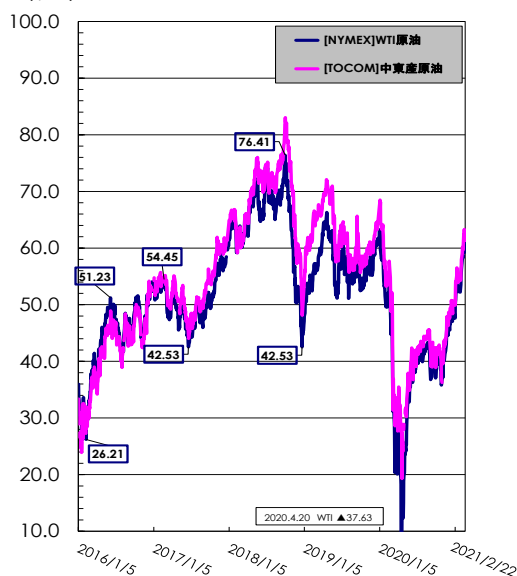
為替は2月11日～17日の間104.74～106.17円の範囲で推移した。2月18日105.74円、19日105.72円、22日105.50円、23日休場、24日105.41円で推移した。

財務省が2月25日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、2月上旬の原油輸入平均CIF価格は、35,866円/klで、前旬比2,350円高、ドル建て54.91ドルで前旬比3.53ドル高、為替レートは1ドル/103.85円。

そのような中で、2月22日時点の小売価格は、ガソリンが前週(2月15日)比1.7円の値上がり、軽油も同1.6円の値上がり、灯油は21円の値上がり(18日ベース)だった。ガソリンは13週連続の値上がり、軽油も13週連続の値上がり、灯油も13週連続の値上がりだった。この週(2月第4週)の原油コストは値上がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに、全社、前週比1.0円の値上げとなった。

原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	2/14 ~ 2/20	2,624 ▼ -354	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	68.2 ▼ -9.2	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	2/20	9,741 ▼ -694	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	2/22	61.72 ▼ -0.62	▲ 6.9
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	2/22	61.49 ▲ 1.44	▲ 10.1
	原油CIF単価 (\$/bbl)	2月上旬	54.91 ▲ 3.53	▼ -15.72
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	35,866 ▲ 2,350	▼ -12,782
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	103.85 ▼ -0.16	▲ 5.65
	外国為替TTSレート (¥/\$)	2/22	106.50 ▼ -0.38	▲ 5.41

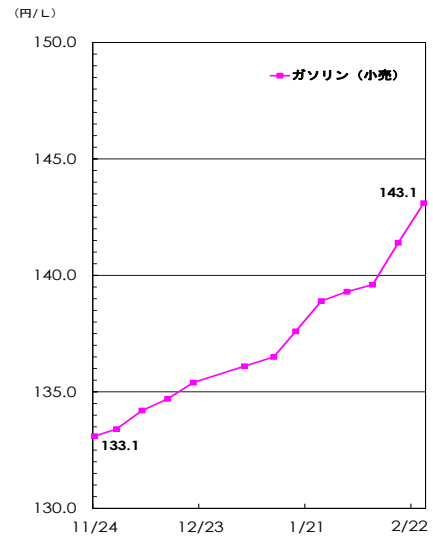
(\$/b)



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比
需給	生産	2/14 ~ 2/20	890 ▲ 17	▲ -
	輸入	"	n.a. n.a.	n.a.
	出荷	"	864 ▲ 55	▲ -
	輸出	"	47 ▼ -37	▲ -
	在庫	2/20	1,964 ▼ -22	▲ -
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/16 ~ 2/22	53.7 ▲ 0.9	▼ -1.2
	先物 [期近物/終値]	2/16 ~ 2/22	52.4 ▲ 1.2	▼ -1.3
	(TOCOM/中部)	2/22	54.3 ▲ 0.6	▼ -0.7
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/22	143.1 ▲ 1.7	▼ -4.7

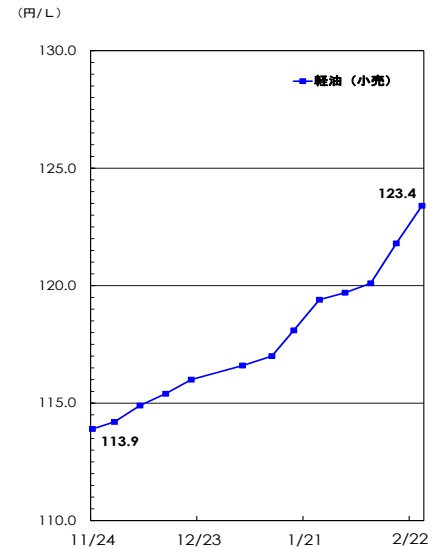
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

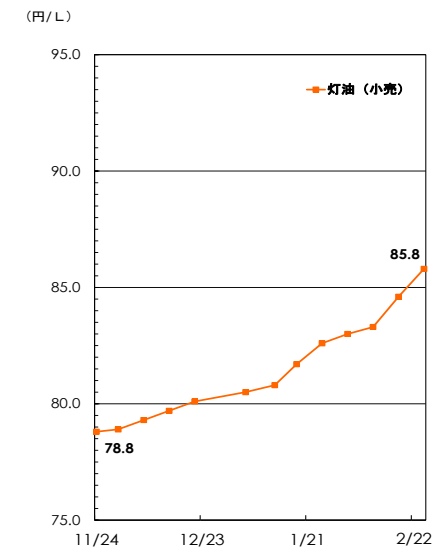
軽油		今週	前週比	前年比
需給	生産	2/14 ~ 2/20	565 ▼ -114	▼ -
	輸入	"	n.a. n.a.	n.a.
	出荷	"	622 ▲ 19	▼ -
	輸出	"	0 ▼ -69	▼ -
	在庫	2/20	1,537 ▼ -58	▲ -
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/16 ~ 2/22	56.6 ▲ 1.3	▼ -1.7
	先物 [期近物/終値]	2/16 ~ 2/22	58.3 ▲ 1.1	▼ -4.6
	(TOCOM/中部)	2/22	- -	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/22	123.4 ▲ 1.6	▼ -4.8

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比
需給	生産	2/14 ~ 2/20	251 ▼ -181	▼ -
	輸入	"	n.a. n.a.	n.a.
	出荷	"	314 ▼ -218	▼ -
	輸出	"	0 ▼ -30	➡ -
	在庫	2/20	1,667 ▼ -62	▲ -
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/16 ~ 2/22	56.1 ▲ 0.9	▼ -1.8
	先物 [期近物/終値]	2/16 ~ 2/22	54.7 ▲ 1.1	▼ -1.6
	(TOCOM/中部)	2/22	56.0 ▲ 1.5	▼ -2.0
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/22	85.8 ▲ 1.2	▼ -6.8



■ 関連情報

1 海外/原油

2月24日のNYMEXのWTI先物原油は反発、終値ベースで63ドル台を付けた。テキサス州を中心とする寒波襲来の影響が長引く中、ファイザーの新型コロナワクチンの米国での増産やジョンソン＆ジョンソン製新ワクチンの1回の接種での有効性の発表、新規感染者の減少など、コロナ禍の早期収束への期待感の高まりで、米国株価は高値を更新し、原油先物も大幅反発した。なお、米国エネルギー情報局(EIA)の週間在庫報告は、原油は前週末比120万バレル増と市場予想(同520万バレル減)に反する5週ぶりの積み増しだったが、ガソリンは同横ばい、中間留分は500万バレル減と、まちまちの

状況で、大きな影響はなかった模様。4月限の終値は前日比1.55ドル高の63.22ドル、5月限の終値は同1.57ドル高の63.00ドル。

EIAによると、2月22日時点のガソリンの小売価格は、前週比13.2セント値上がりの1ガロン2.633ドル(74.0円/ℓ)、ディーゼルは同9.7セント値上がりの2.973ドル(83.5円/ℓ)となった。ガソリンは13連続の値上がり、ディーゼルは16週連続の値上がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2021年2月14日～2月20日に休止したトッパ能力は49.2万バレル/日で、前週に対して8.6万バレル/日増加した(全処理能力は345.8万バレル/日)。

原油処理量は262.4万klと、前週に比べ35.4万kl減少。前年に対しては67.8万klの減少。トッパ稼働率は68.2%と前週に対して9.2ポイントの減少、前年に対しては16.1ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてガソリン、C重油が増産、その他の油種で減産となった。ガソリン/2.0%増、ジェット/30.0%減、灯油/41.9%減、軽油/16.8%減、A重油/26.3%減、C重油/0.5%増。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比3.5万kl減)。軽油の輸出は0.0万kl(前週比6.9万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は前週比で灯油、C重油が減少、その他の油種で増加となった。前年比では灯油、軽油、A重油が減少となり、その他の油種で増加となった。ガソリンの出荷は86.4万kl(対前週6.8%増)と2週振りに増加した。ジェット5.9万kl(対前週34.5%増)、灯油31.4万kl(対前週41.1%減)、軽油62.2万kl(対前週3.2%増)、A重油24.2万kl(対前週0.2%増)、C重油16.8万kl(対前週32.5%減)。

(単位: 千KL)

	今週 (2/14 ~ 2/20)	前週 (2/7 ~ 2/13)	前週比
ガソリン	864	809	▲ 55 (7%)
ジェット燃料	59	44	▲ 15 (34%)
灯油	314	532	▼ -218 (-41%)
軽油	622	603	▲ 19 (3%)
A重油	242	241	▲ 1 (0%)
C重油	168	248	▼ -80 (-32%)
合 計	2,269	2,477	▼ -208 (-8%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

2月20日時点の在庫は、C重油で積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対してはジェット、C重油が減少となり、その他の油種で増加となった。

ガソリンは196.4万kl、前週差2.2万kl減。前年に対しては26.9万kl多い。

灯油は166.7万kl、前週差6.2万kl減。前年に対しては6.7万kl多い。

軽油は153.7万kl、前週差5.8万kl減。前年に対しては7.7万kl多い。

A重油は70.7万kl、前週差3.5万kl減。前年に対しては2.0万kl多い。

C重油は183.6万kl、前週差3.1万kl増。前年に対しては3.1万kl少ない。

(単位: 千KL)

	今週 (2/20)	前週 (2/13)	前週比
ガソリン	1,964	1,986	▼ -22 (-1%)
ジェット燃料	732	739	▼ -7 (-1%)
灯油	1,667	1,729	▼ -62 (-4%)
軽油	1,537	1,595	▼ -58 (-4%)
A重油	707	742	▼ -35 (-5%)
C重油	1,836	1,805	▲ 31 (2%)
合 計	8,443	8,596	▼ -153 (-1.8%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

2月16日～22日の指標原油価格は前週(2月9日～15日)比で値上がりし、為替レートも円安で、円建ての原油コストは値上がりしたと見られる。

これを受けて、次週の大手元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社、前週比1.0円の値上げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

2月16日～22日の製品スポット市況は、2月9日～15日平均と比べ、全油種・全取引で値上がりした。

直近(2/16～2/22)の陸上スポット価格平均値(千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格)は、前週比で、ガソリンは0.9円の値上がり、灯油も0.9円の値上がり、軽油も1.3円の値上がりだった。直近週(2/16～2/22)において、ガソリンは107円台でわずかに値上がり、灯油は55～56円台で値上がり後わずかに値下がり、軽油は55～56円台で値上がり後横ばいで推移した。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(2/16～2/22)に、前週比で、ガソリンは1.3円の値上がり、灯油は1.2円の値上がり、軽油は1.2円の値上がりだった。海上スポット価格は、同期間(2/16～2/22)に、ガソリンは108～109円台で大きく値上がり後値下がり、灯油は54～57円台で大きく値上がり後値下がり、軽油は57～58円台で大きく値上がり後値下がりして推移した。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは1.2円の値上がり、灯油は1.1円の値上がり、軽油は1.1円の値上がりだった。先物価格は、同期間(2/16～2/22)に、ガソリン106円台でわずかに値上がり、灯油53～55円台で出入り後わずかに値下がり、軽油57～59円台で値上がり後大きく値下がりして推移した。

(RIM)		(単位: 円/ℓ)		
ス ポ ッ ト 価 格	陸上ローリー 4地区平均]	今週 (2/16～2/22)	前週 (2/9～2/15)	前週比
	レギュラー	53.7	52.8	▲ 0.9
	灯油	56.1	55.2	▲ 0.9
	軽油	56.6	55.3	▲ 1.3

(TOCOM)		(単位: 円/ℓ)		
先 物 価 格	[期近物/終値] [平均]	今週 (2/16～2/22)	前週 (2/9～2/15)	前週比
	レギュラー	52.4	51.2	▲ 1.2
	灯油	54.7	53.6	▲ 1.1
	軽油	58.3	57.2	▲ 1.1

※上記価格は税抜き価格

参考値 (2/16～2/22実績値)		(単位: 円/ℓ)		
油種	現物	先物	平均	
ガソリン	▲ 0.9	▲ 1.2	▲ 1.1	
灯油	▲ 0.9	▲ 1.1	▲ 1.0	
軽油	▲ 1.3	▲ 1.1	▲ 1.2	
A重油	▲ 1.6			

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

2月22日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週(2月15日)比1.7円高の143.1円、軽油も同1.6円高の123.4円、灯油は18ℓベースで同21円高の1,544円(1ℓベースでは同1.2円高の85.8円)。ガソリンは13週連続の値上がり、軽油も13週連続の値上がり、灯油も13週連続の値上がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは46都道府県、横ばいはなし、値下がり1県だった。全国最安値は136.0円の徳島県(前週比2.4円高)、その次に安かったのは137.8円の宮城県(同1.4円高)、最高値は151.4円の鹿児島県(同1.6円高)だった。最も値上がりしたのは同4.2円高の神

奈川県(142.0円)、横ばいはなし、値下がりしたのは同0.1円安の愛知県(141.6円)だった。

今週(2月16日～22日)は、指標原油価格が値上がりし、為替レートも円安で、円建ての原油コストは値上がりしたと見られる。次週(2月25日～3月3日)適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社、前週比1.0円の値上がりとなった。次回調査時(3月1日)のガソリンの小売価格は、値上がりが見込まれる。

(資工庁公表) [週動向]		(単位: 円/ℓ)			直近高値	
小 売 価 格	今週 (2/22)	前週 (2/15)	前週比			
	レギュラー	143.1	141.4	▲ 1.7	08/8/4	185.1
	灯油	85.8	84.6	▲ 1.2	08/8/11	132.1
	軽油	123.4	121.8	▲ 1.6	08/8/4	167.4

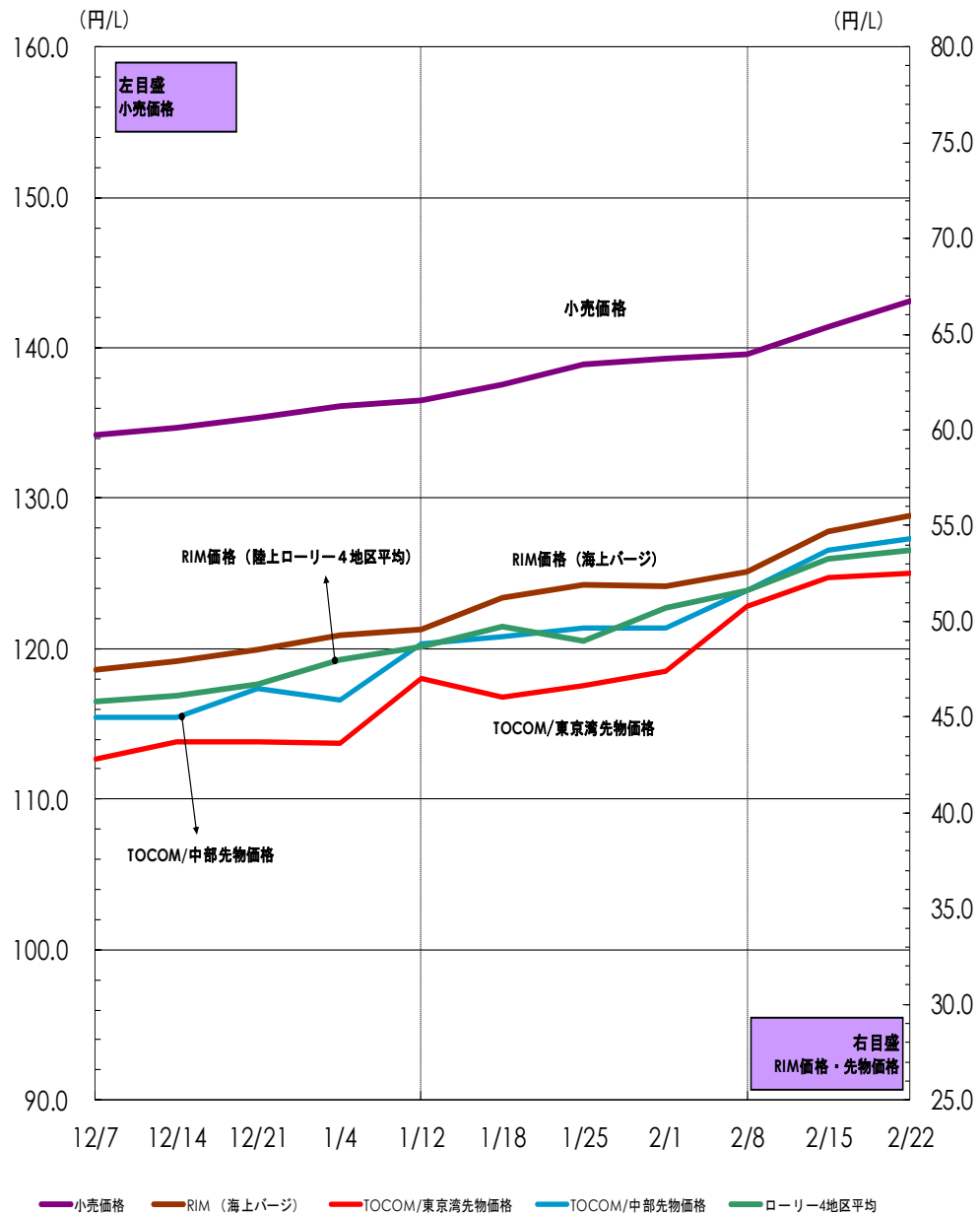
※ 現金一般価格の全国平均値(消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2020/12/7 ~ 2021/2/22)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格

②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2020第34号)の公表は、3/5(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(令和2年3月末現在)は、8月26日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange: NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange: TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate: 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾 及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁-HPIに掲載)。